# 『枕草子』に取材した絵画について

浜口俊裕

## はじめに

『枕草子』に取材した絵画は、どのくらいあるか判然としていないが、『源氏物語』に因む絵画数には及ばないにしても、意外に多く伝わっているのである。中でも圧倒的に多いのが「香炉峯の雪」章段に因む絵画で、軸装をはじめ、近世の整版本の挿絵、かるた、双六絵、雑誌の口絵、教科書の挿絵、スカート柄など広範に伝わる。この「香炉峯の雪」章段の絵画についてはすでに拙稿[1]で詳述したので、本稿では、「香炉峯の雪」章段以外の絵画について述べていきたい。

## 枕草子絵巻

長州藩浅野家に伝来した白描の『枕草子絵巻』一巻である。その成立は、確証を得がたいものの、鎌倉時代十三世紀末頃と見られている[2]。この『枕草子絵巻』の詳細を与えられた紙幅で述べる余裕はないので、ここでは構成についてだけ簡潔に概観しておくと、詞書と絵ともに第1段から第7段で成る頗る小規模な絵巻である。第2段と第3段には詞書に見合う絵画の配置に錯簡があり[3]、それを補訂した構成は、次の如くになる。

第1段　九九段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほど[4]」
絵中宮定子と東宮女御藤原原子の対面。
第2段　一三〇段「五月ばかり、月もなう、いと暗きに」
絵呉竹の挿入。
第3段　一二八段「故殿の御為に、月毎の十日」　絵道隆の追善供養後の酒宴。
第4段　八八段「無名といふ琵琶の御琴を」　絵一条帝と中宮と無名の琵琶。
第5段　八二段「職の御曹司におはしますころ」①　絵雪山づくり。

第6段　八二段「職の御曹司におはしますころ」②　絵
卯槌在中の消息文開封。
第7段　一二二段「はしたなきもの」　絵石清水八幡宮
還幸の行列。

右の第7段は類聚的章段に属するが、絵巻の詞書部分は体験的回想談であることを重視すると、『枕草子絵巻』の内容は、すべて体験的回想談での構成であることが注視される。またこの絵巻の配列は、今日の一般的な三巻本『枕草子』の章段順に準じた構成でないことも注意される。さらに第5・6段より自明な如く題材は興味のある章段から各々一章段ずつ厳選した構成でもなく、佐野みどり氏も「ときには、一つの章段を分割してまで、一段一エピソードの形にこだわり、主題の純化を徹底する」[5]と指摘する。

なお、松岡映丘が模写した『枕草子絵巻』（制作年不明）が逸翁美術館にある。

小堀鞆音筆（六段　上にさぶらふ御猫は）

落款に「鞆音絵／印（弦廼舎）」とある図1の掛幅は、明治・大正期画壇の巨匠の一人で、近代歴史画の父と称され、帝室技芸員や帝国美術院会員であった小堀鞆音（文久四年〈一八六四〉～昭和六年〈一九三一〉）の絵画。鞆音三男の日本画家小堀安雄氏鑑定の箱書に、表「翁丸」、裏「枕草紙鞆音筆　安雄鑑並題／印（安雄）」とある如く、一条院内裏を舞台にした『枕草子』「上にさぶらふ御猫は」章段を題材にする。この章段の詳細は拙稿[6]を参看せられたいが、内裏の飼犬であった翁丸に清少納言が「三月三日、頭弁の、柳蘰させ、桃の花を挿頭に刺させ、桜腰に差しなどして、ありかせたまひしをり、『かかる目見む』とは思はざりけむ」との心情を吐露した如く、翁丸は、長保二年（一〇〇〇）三月三日桃の節供に美しく飾り立てられ頭弁藤原行成に随行して栄光の一日を迎えたが、翌四日以後二十七日以前の間に、その境遇が暗転する。その発端は『枕草子』の冒頭部に、

上にさぶらふ御猫は、かうぶりにて、「命婦おとど」と、いみじうをかしければ、かしづかせたまふが、端に出でて臥したるに、乳母の馬の命婦、「あな、まさなや。入りたまへ」と呼ぶに、日のさし入りたるに眠りてゐたるを、おどすとて、「翁丸いづら。命婦のおとどくへ」といふに、「まことか」とて、たれものは走りかかりたれば、おびえまどひて、御簾の内に入りぬ。

とあり、五位に叙爵し殿上を聴された一条天皇の愛猫「命婦のおとど」に、猫の乳母馬命婦が「翁丸いづら。命婦のおとどくへ」とけしかけ、屈強な翁丸が真に受けて威嚇したのが翁丸受難の始まりだった。『小右記』長保元年九月十九日条に「日者内裏御猫産レ子、女院（彰子）・左大臣（道長）・右大臣（顕光）有二産養事一、有二衝重・垸飯・納レ筥之□一云々、猫乳母馬命婦、時人咲レ之云々、奇怪之事天下以目、若是可レ有レ徴歟、未レ聞三禽

獣用「人礼」、嗟乎[7]」とある如く、猫に人の礼式を適用して産養の儀を催し、馬命婦を乳母に任じるなど、異例の厚遇で迎えた「命婦のおとど」であり、威嚇した翁丸は勅勘を蒙って内裏から追放された。

図1の黒塗りの浜床に繧繝縁の畳二枚を敷き、帷に朽木形文様を意匠した御帳台に昇るのは、「命婦のおとど」なら合点もいくが、猫特有の長い眉上毛や唇脇の上唇毛、口角毛などの鬚がなく、目元から鼻先にかけて筋の通った長い口吻部や脚高の様相からして、これは「命婦のおとど」でなく、箱書通り翁丸と思われる。そうすると、『枕草子』には翁丸が殿上を聴されていた徴証がなく、『枕草子』に準拠した図様と異なる画意と見なければならないであろう。前述した如く一条天皇の飼犬として桃の節供に華やかな姿で衆目を集めた翁丸は、ほどなく内裏から追放され、一時「死にければ、陣の外にひき棄てつ」と言われるなど、孤立無援の辛酸を嘗めるが、最後に「さて、かしこまりゆるされて、もとのやうになりにき」となり、勅勘が解けて再び元の身の上に復帰して帰結する。翁丸の復帰後の有様は読者の想像に委ねられているが、鞆音は、「もとのやうになりにき」を内裏の飼犬に復帰した事象としてだけの表層的な解釈ではなく、復帰後の境遇が以前にもまして盛運で多幸であったことへの期待を託した理解を試みたのでなかろうか。そこで、あえて昇殿も聴され子宝にも恵まれて昇華する翁丸にデフォルメして、図1の意匠に結実したのであるまいか。

図1　小堀鞆音

この波乱に富む翁丸の姿は、鞆音の心奥に共感を与えるものがあったに違いない。というのも、翁丸の姿は、小堀鞆音の境遇とも大いに重なっているように思われるからである。鞆音の嫡孫小堀桂一郎氏によると、鞆音が「金崎管絃之図」や「大阪後役之図」を出品した明治二十三年の第三回内国勧業博覧会は歴史画家として斯界の認知を得た記念的な年とされ[8]、その後も「宇治橋合戦」などの秀作を発表して大いに注目を集め、七年後には東京美術学校助教授に任じた。しかし、その翌年同校の校長岡倉天心に起因する学校騒動で岡倉天心が解任されると、これに抗議する教員三十四名も連袂辞職し、鞆音もその一員として美術学校を退いた。その後の鞆音は画壇での孤立と親族の窮境などに遭うが、明治四十一年には再び東京美術学校に教授として復帰し、昭和六年に他界するまで在職した。

このように鞆音の境遇には翁丸の明暗と似るものがあり、鞆音が頗る稀な画題「翁丸」を意匠した因縁[9]も諒解されようし、『枕草子』への高い関心と豊かな想像力がこの画題との向き合いを可能にしたとも言えよう。

この図1の制作年は不明であるが、如上の背景を勘案すると、東京美術学校に復職しえた明治四十一年、四十五歳以降

の作品になろうか。因みに、鞆音には大正十四年の淡交会第二回展覧会にも「清少納言」の出品がある。

なお、図1の翁丸と子犬の意匠は鞆音の独創ではない。図2の栗原信兆が朔平門に犬の親子を描く天保十四年（一八四三）刊『先進繍像玉石雑誌　羽』の挿絵[10]からの転用と思われる。因みにこの朔平門も、実は、東京国立博物館蔵国宝『平治物語絵巻』六波羅行幸巻第一段に、内裏に幽閉された二条天皇が女装して平清盛六波羅第へ逃れる時の朔平門を模したもので、これに犬の親子を補筆してなったのが図2であり、この犬の意匠を鞆音が翁丸図に活用したのである。有職故実に精しかった鞆音は多くの書物を繙いて画業を研いたと見られるが、その一書に『先進繍像玉石雑誌』の活用が判明するのである。

図2　栗原信兆

松岡映丘筆（六段　上にさぶらふ御猫は）

明治四十一年東京美術学校助教授となり、主任教授小堀鞆音の下で助手を勤めた松岡映丘[11]にも、翁丸をモチーフにしたと見られる素描画、図3がある。[12]すでに拙稿[13]に詳述したが、長保二年二月十一日から三月二十七日まで皇后定子は一条院今内裏の北二対に滞在した。図3は、この北二対の簀子で、裳唐衣姿の女性が語り口調で手を差し伸べ、階下で首輪をした犬が嬉しげに尾を振って対峙する構図。これを木村重圭氏は、仮題で「女房と犬」とし、「画題・本図ともに不明。女性の十二単の衣を描く複雑な線は、最終ポーズを決めるまでの推考のあとをよく残しており興味深い[14]」と説くが、素描画の女性は清少納言、犬は翁丸と見るべきで、画題も「清少納言と翁丸」が穏当だろう。翁丸の無事が確認されて、北二対に天皇や内裏の女房たちも集り、翁丸に声をかけると、翁丸もそれに応えて、「呼ぶにも、今ぞ起ち動く」とある『枕草子』大詰めの微笑ましい場面を描いたと思われる。

なお、松岡映丘には「枕草子四題―御ぐしあげ・寝覚・野分のあと・雪」（大正七年金鈴社第三回展／関東大震災で焼失）、「御ぐしあげ」（大正15年）、「寝ざめ」（大正15年）、「枕草子―秋」（大正15年）、「枕草子絵巻」模写（制作年不詳）など、『枕草子』に題材を得た絵画が多数知られる。[15]

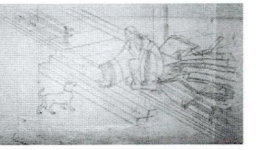

図3　松岡映丘

土佐光一筆（二〇段　清涼殿の丑寅の角の）

清少納言が中宮定子に初出仕した翌年の正暦五年（九九四）二月、清涼殿の春の一日を『枕草子』二〇段に、次の如く記している。

清涼殿の丑寅の角の、北のへだてなる御障子は、荒海の絵。生きたるものどものおそろしげなる手長・足長などをぞ描きたる。上の御局の戸をおしあげたれば、つねに

目に見ゆるを、憎みなどして、笑ふ。㋩高欄のもとに、青き瓶の大きなるを据ゑて、桜のいみじうおもしろき枝の、五尺ばかりなるを、いと多く㋥挿したれば、高欄の外まで咲きこぼれたる昼つ方、大納言殿、桜の直衣のすこしなよらかなるに、濃き紫の固文の指貫、白き御衣ども、うへには濃き綾のいとあざやかなるを出だしてまゐりたまへるに、㋭主上のこなたにおはしませば、㋬戸口の前なる細き板敷にゐたまひて、ものなど申したまふ。㋮御簾のうちに、女房、桜の唐衣どもくつろかに脱ぎ垂れて、藤・山吹など、いろいろ好ましうてあまた、小半蔀の御簾よりもおし出でたるほど、昼の御座のかたには、御膳まゐる足音たかし。（中略）㋯白き色紙おしたたみて、「これに、ただ今おぼえむ古き言、ひとつづつ書け」と仰せらるる。（中略）春の歌・花の心など、さいふいふも、上﨟二つ三つばかり書きて、「これに」とあるに、「年経れば齢は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし」といふ言を、「君をし見れば」と書きなしたる、（後略）。

この清涼殿での大慶を描くのが図4で、款記に「平安画院土佐光一筆」とある。土佐光一は、最後の土佐派二十五世で、明治中期から昭和期の画家。図4は、上方を霞で区切り、金物を打った黒塗りの浜床に、高麗端で山藍色の土敷二帖と赤地小文唐錦で縁を飾る緑青の表筵を北南に敷き、西南角に鎮子の台、帳が朽木形文様の御帳台正面に吽形の狛犬などを意匠して、清涼殿の母屋を表象する。ここに一条天皇が不在なのは、『枕草子』傍線部㋺㋭の如く中宮定子の弘徽殿の上御局に赴いた趣向であろう。同図の下方は、㋑の清涼殿丑寅の角を俯瞰した図様。荒海の布障子脇の北妻戸が開き、北三階前の宇治の網代布障子に面して㋩の高欄の傍らに見事に咲く桜の枝を多数挿す青磁の大きな花瓶を据え、㋩の弘徽殿の上御局妻戸口の板敷には、有文の垂纓二枚重の冠を被り、㋥の桜重ねの直衣と下に白い単衣、濃い紅の綾織物など五領を重ねた鮮麗な出衣に濃い紫の固文の指貫を着けた二十一歳の成年、正三位権大納言藤原伊周が着座する。また㋺の上御局は、山水の襖絵で麗しく装飾した室内と、奥に顔半ばの中宮を描く。㋮の御簾下に打出をした所の小半蔀は、『大内裏図考証』弘徽殿の上御局図[16]にも見る如く、北廂北の黒戸廊の小半蔀であるのだが、図4はこれを上御局東面に適用し、小半蔀を上げて外側に膨らみ撓んだ御簾下に打出の装束を描く。女房たちを妻戸口近くにも描き、戸口の末席で白い色紙に墨書する清少納言は、まだ新参との趣意であろう。これは㋯の如く中宮が「白き色紙」に古歌を一首ずつ書けと命じて、上﨟から回ってきた色紙に「年経れば」の和歌を書く光景に相当する。

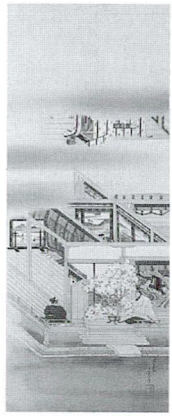

図4　土佐光一

なお、図4は山口県岩国市の吉川家蔵冷泉為恭筆の「枕草子図」に酷似した構図である。しいて違いを挙げれば、夜御殿の屏風裏紙や上御局の襖絵の色紙形、昆明池障子裏の嵯峨野小鷹狩図の上空などに色彩の小異があるほか、上御局北戸口の御簾を帽額近くに巻き上げて下長押にまで下げないのが為恭筆との違いである。図4の精緻な描写は、権大納言の冠直衣姿や直衣に象る白浮線綾丸文固地綾、二間と上御局際に立つ布障子の嵯峨野小鷹狩図、北端の宇治の網代図など、有職故実に通じた画力にも支えられていよう。幕末期の元治元年（一八六四）、尊王攘夷派の長州藩士らに殺害された行年四十二歳の復古やまと絵の第一人者冷泉為恭も有職故実に関する該博な知識で知られた絵師であるから、図4はその為恭筆本を模倣したのであろうか。

下河辺拾水筆（三一段　菩提といふ寺に）

『枕草子』「菩提といふ寺に」章段は、菩提寺の法華八講に詣でた清少納言が、ある人から「疾く帰りたまはぬ、いと寂々し」と言われ、蓮の葉裏に「求めてもかかる蓮の露をおきて憂き世にまたは帰るものかは」と書いて遣った話である。結縁の尊さを賛嘆した一段で、「求めても」の歌は、『清少納言集』詞書に「ほたいといふ所に、せらきくとて人のもとよりとてかへりねとおほつかなきにとあるに」[17]（『清少納言Ⅰ』二〇）、「ほたいといふところに、せきやうきくを、ひとのもとよりとくかへりたまへ、いとおほつかなしとありければ」（『清少納言Ⅱ』一八）とあり、『千載和歌集』巻第十九釈教歌一二〇六詞書に「菩提といふ寺に結縁講しける時、聴聞にまうでたりけるに、人のもとより、とく帰りねといひたりければつかはしける」[18]とある。

当章段の挿絵は複数知られ、図5はその一つ。短冊原題簽の破損が甚だしく書名が『□□海　全』としか判らず、刊記の散失で絵師不明確だが、安永五年（一七七六）の架蔵『女教訓躾方日用宝鑑百人一首姫小松』に、下河辺拾水画の図5と同じ挿絵がある。[19]従って、図5の挿絵は河辺拾水画と推定される。

図5は、雲形に「清少納言／清少納言ハ清原深養父の曾／孫元輔の娘なり一条院の女房／にして枕草紙を作り心／ばへを／あらハせりとぞ／千載集に菩提といふ／寺に結縁の講じける／ときまふでたりしに／人のとくかへれと云遣し／けれハ／もとめてもかゝる／蓮の露をきて／うき世にまたハ／かへるものかは」[20]と記す。この記事の「千載集に」から取材元は『千載和歌集』のようだが、本稿では『枕草子』に因む絵画の対象に含めた。図様は、手紙を届けた使者が控えて返事を待つ間、「疾く帰りたまはぬ、いと寂々し」との巻手紙を見る立

図5　河辺拾水か

姿の清少納言を意匠する。尊い講会を差し措いて憂き世に帰り難い心境を歌に詠み、帰りを待ち侘びる人の思いをそっとかわした才媛の人徳を賞揚したと見られる挿絵である。

桂雪典筆（三一段　菩提といふ寺に）

明和七年（一七七〇）の木村敦寛著『女撰要和国織』に、図5と意匠の異なる挿絵がある。画工は大阪の桂雪典（宗信）。架蔵本図5と国立国会図書館蔵本図6の記事の異同は、「元輔の娘―元輔の子」「一条院―一条の院后宮」「枕草紙を作り心ばへをあらハせりとぞ―枕草紙の作者也」「講じ―講し」「まふで―まふて」「露をき―露をおき」「また―又」「ものかは―物かハ」の如くで、漢字や仮名、清濁の相違が主で、内容に大差がない。挿絵の図6は、図5の手紙を届けた使者を除去し、手紙を見る清少納言の傍らの、芭蕉の大形の葉が目を引く。芭蕉の描画は、身の虚しさを芭蕉に喩えた『往生要集』巻上の「是ノ身ハ虚偽ナルコト猶ホ如シ二芭蕉ノ一」や、寺塔や僧坊の傍に植えた『当麻曼陀羅疏』巻第九の「芭蕉ハ又或ハ無常ノ観或ハ一法出生無量義ノ意ニテ、寺塔ノ前ニモ殖エ僧坊ノ傍ニモ殖ウ。思フニ王城ニモ亦可キレ殖ウ也」という観想などに因るのであろうか。講会に詣でて仏縁を結ぶ才女清少納言の心の在り方を例に挙げ、教養を求める婦女子に信心の大切さを教化する仏教的色彩の強い挿絵になっている。

図6　桂雪典

下河辺拾水筆（三一段　菩提といふ寺に）

図7も、図5・6と同じモチーフの下河辺拾水の挿絵で、寛政六年（一七九四）刊の架蔵『百人一首花洛織』にある。同図は寛政七年『女用文章万代宝鑑諸礼躾方司百人蜀紅錦』、文化十二年（一八一五）『女教訓女躾方四季用文章百人一首知恵袋』にも収載する。挿絵は、手紙を届けた使者が座る前で、文筥から取り出した消息文を着座して見る清少納言を描く。清少納言と使者の衣装の文様、使者の髪型、花木の意匠が図5に酷似する。挿絵上部の解説文も図5に近似する。

図7　下河辺拾水

橘守国筆（七七段　頭の中将の、すずろなるそら言を）

『枕草子』「頭の中将の、すずろなるそら言を」章段は、おおよそ次のような展開である。①清少納言は誤解して立腹している頭中将藤原斉信と絶交する。②雨がひどく降り所在ない折に、物忌に籠った斉信が寂しさを覚える。③その夜、斉信は主殿寮の官人を使者にして、清少納言に「蘭省花時錦帳下」の下句を問う手紙を届ける。④清少納言は傍らの炭櫃の消え炭で「草の庵を誰かたづねむ」と記し使者に返す。⑤翌

朝、右中将源宣方が清少納言を訪ね、清少納言の返事に斉信たちが上句を付けられなかったことを打ち明ける。⑥別れた夫の修理亮橘則光が清少納言を訪ね、斉信らを感心させた誉れを喜ぶ。⑦「草の庵」の件が一条天皇と中宮定子にも是認されて清少納言は面目を保った。⑧この後に斉信は清少納言への誤解を解いたようだ。

右の斉信と清少納言の問答③④は、白楽天が長安の旧友三人に寄せた『白氏文集』巻十七律詩五「廬山草堂、夜雨独宿、寄牛二・李七・庾三十二員外」一〇七九に拠っている。

丹霄攜レ手三君子、白髪垂レ頭一病翁。
蘭省花時錦帳下、　廬山雨夜草庵中。
終身膠漆心應レ在、半路雲泥迹不レ同。
唯有二無生三昧觀一、榮枯一照兩成レ空。(25)

この詩句の首聯第一句に斉信からの非難も聞き流して中宮に献身的に奉仕する清少納言を彷彿させ、第二句に清少納言に交渉を断たれて疎外感を否めない斉信の気鬱にも通うものがあり、頷聯第三句「蘭省花時錦帳下」を中宮のもとで快活な清少納言に見なして斉信の問いにし、第四句「廬山雨夜草庵中」を答えさせて雨夜に物忌に籠る斉信の寂寥感を清少納言に印象づけ、頸聯第五句の変らぬ友情の希求に一縷の望みを託して、清少納言の歩み寄りを窺ったかに見受けられる。しかし、斉信の目論見は外れた。清少納言の返事が、詩句「廬山雨夜草庵中」に拠らず、かつて藤原公任が出題した連歌で『公任集』四〇一に、

いかなるをりにか
草のいほりをたれかたづねむ
とのたまひければ、いる人たかただ
ここのへの花の宮こをおきながら(26)

とある下句「草のいほりをたれかたづねむ」を借用して、斉信への答えにしたからである。この清少納言の対応は、萩谷朴氏が「当代随一の歌人で理論家の公任の句を借用した清少納言を非難することは、間接には公任をも非難することになって、さしさわりが生じる。斉信たちとしては、不動金縛りにあったも同然、その引用の適切さと同時に、寸分すきのない清少納言の駆け引きの巧みさ」(27)と指摘する如くであり、さすがの斉信も「いみじき盗人を。なほ、得こそ思ひ捨つまじけれ」(『枕草子』)とその機智に驚嘆せざるを得なかった。二の句を継げなくなった斉信は、「さて後ぞ、袖の几帳なども取り捨てて、思ひなほりたまふめりし」(『枕草子』)と清少納言への非難を収めるほかなかったのである。

この話題は元文五年（一七四〇）梓行の『絵本鶯宿梅』巻一「蘭省花時」に摂取された。

頭中将斉信のもとより清少納言の方へ蘭省花時／錦帳下と書て末ハいかに〳〵ときくに返事したまへ／とあるを清少納言是が末しりがほにまんなにかき／たらんも見ぐるしとおもひて其おくにすびつのきえ／たるすみ

のあるして草のいほりを誰かたづねん／と書て返しぬ此意ハこれほどの事を誰か尋んと／の心をいひて清少納言のもとよりにくまれてありけれバ／いかで斉信の問給ハんとの心をそへたり[28]

挿絵は後素軒橘守国が図8を描く。囲炉裏の傍らで斉信からの消息に消え炭で返事を書く清少納言と、折烏帽子で畏まって座る斉信の使者である主殿寮の官人を、記事に即して手際よく描く。

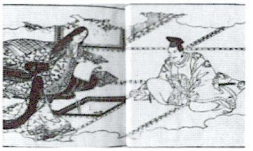

図8　橘守国

土佐光貞筆（九四段　五月の御精進のほど）

長徳四年（九九八）五月五日、清少納言ら女房四人が牛車で賀茂の奥、松ヶ崎付近に郭公の声を聞きに行った帰路、咲き誇る卯の花の枝を折り牛車に挿し飾った。この車を見せたくて侍従藤原公信宅に立寄るのが『枕草子』での話である。この絵画が図9で、款記に「画所預従五位上土佐守藤原光貞」とある。光貞は土佐光芳の二男で、江戸中期から後期の絵師。安永四年（一七七五）正月二十三日従五位上土佐守に叙任、天明二年（一七八二）十月二十五日正五位下に昇叙したので、図9は三十八～四十五歳の制作になろうか。[29]

図9　土佐光貞

当図は軸装の上方に、雲海の中に京の奥地を印象づける遠山の頂きを大小二つ連ねて描く。下方の近景には、土坡の傍らに駐車する網代車の後部を描く。懸け下ろした後簾と左右の袖格子との狭間から絹布の下簾が下がるが、中の人の様子は窺えない。画題は伝わらないが、屋形の棟や立板などに白い色鮮やかな株立ちの卯の花の長い枝をたくさん挿した意匠は、紛れもなく『枕草子』第九四段の、

卯の花の、いみじう咲きるを折りて、車の簾・側などに挿しあまりて、襲ひ・棟などに長き枝を、葺きたるやうに挿したれば、ただ「卯の花の垣根を、牛にかけたる」と見ゆる。供なる郎等もいみじう笑ひつつ、「ここまだし」「ここまだし」と、挿しあへり。

に着想を得たものである。画中に公信邸を連想させる趣向を凝らしていないので、画面は、公信邸を辞去後、公信が追走して来て車を停車した場面で、『枕草子』に、

この車のさまを、いみじう笑ひたまふ。「うつつの人の乗りたるとなむ、さらに見えぬ。なほ、下りて見よ」など笑ひたまへば、供に走りつる人、ともに興じ笑ふ。

とある件に相当しよう。牛車の後方で立烏帽子を被り、盤領や袖括の紐、当帯のある狩衣に指貫の二人は、車を追走して来た人たちで、右側の紅の単に萌黄の狩衣が侍従公信、左側の縹の狩衣が「供に走りつる人」であろう。

土佐光一筆（九四段　五月の御精進のほど）

図10は、画題「清少納言卯の花車の図」、款記に「画院後裔土佐光一筆」とある。白髪の老いた牛飼は、長年の経験で牛の扱いに手慣た様を象徴するのか、鞭を手にして見事に牛を静止させている。小八葉車の物見御簾形や前簾の縁に卯の花を挿し終えた裸足の白張は、後簾の縁に卯の花枝を懸命に葺いている。屋形の下に多数散在する卯の花の葉は、臨場感を画面に添えている。屋形の上葺や袖、立板に散らす丸の文様は、蓮弁を象る八葉車の意匠だが、図10では丸の文様数が足りない。これは絵師が故実に疎いのでなく、八葉は文の大小で大八葉・小八葉があり、図様での判別に誤解を招かぬようにあえて丸の数を減らすことで、丸八個の大八葉車でなく、小八葉車であることの画意と解したい。この小八葉車の鴟の尾に、桂に紅の張袴で立添うのが清少納言。大輪の脇で卯の花の枝を手にして白張の作業を補助する垂髪の童は、車副役の牛飼であろうか。こうした人々の所作は『枕草子』に具体的な記事がなく、土佐光一独自の創造的美意識の世界である。

なお、赤鞦を懸けた班牛は、『枕草子』四八段に「牛は、額は、いと小さく白みたるが、腹の下・足・尾の筋などは、やがて白き」という理想的な様相に近く、静止する姿も東京国立博物館蔵『平治物語絵巻』六波羅行幸巻第一段の源氏方に幽閉された二条天皇が朔平門から八葉車で脱出する時の班牛に似ている。

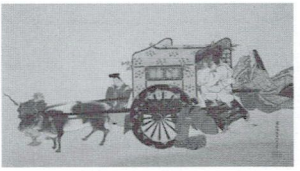

図10　土佐光一

橘守国筆（一二九段　頭弁の、職にまゐりたまひて）

『枕草子』「頭弁の、職にまゐりたまひて」章段は、職御曹司に清少納言を訪ねた頭弁藤原行成が丑の刻前早々に帰り、清少納言に「鶏の声に催されてなん」と言い訳の手紙を遣ると、早々の辞去に清少納言が「いと夜深くはべりける鶏の声は、孟嘗君のにや」と切り返し、行成の「『孟嘗君の鶏は、函谷関をひらきて、三千の客、わづかに去れり』とあれども、これは、逢坂の関なり」との返事に、清少納言が「夜をこめて鶏のそら音ははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ、心かしこき関守はべり」と反駁すると、行成が「逢坂は人越えやすき関なれば鶏鳴かぬにも開けて待つとか」と返す話である。この二人の応酬は、孟嘗君が食客の鶏鳴によって函谷関を脱出した『史記』巻七十五・孟嘗君列伝第十五の故事を踏まえるが、『絵本鶯宿梅』巻一「清少納言」に、次の記事と二種類の挿絵を収載する。

清少納言ハ清原元輔が女なり其比行成卿頭弁にてありし／時少納言と一夜かたらひ給ふて後の朝夜を通して昔物／語もきこえあかさんとせしを鳥の声にもよほされてとありし／に清少納言の返しにいと夜ふかく侍ける鳥の声ハ孟嘗／君のにやと聞えたれバまうさう

くんの鶏ハ函谷関を開て三千／客わづかにされ
といふハ逢坂関の事なりとあれバ清少納／言の歌に夜
をこめてとりのそらねハはかるとも世にあふさ／かのせ
きハゆるさじ心かしこき関もり侍るめりときこゆたち
かへ／りあふさかハ人こえやすき関なれバ鳥もなかねど
あけて／まつとかとありしとそ

左の図11は、燈台に火が点り、半夜に行成が清少納言の許を辞去する挿絵。図12は、鶏鳴の得意な家臣が木に登って鳴き真似をすると、関所の棟で眠る鶏がつられて鳴き、夜明けと勘違いした関守が開門する異時同図の函谷関図で、その故事を図中に「函谷関図／孟嘗君が三千の士卒の中／鶏鳴と云者よく鶏のまねを／なす困て木の上にあがりて鶏／の声をなして夜ふかきに関を／開かせて関守をあざむき／通りしとなり」と簡潔に記す。棟の鶏は左が雄、右が雌の番いである。番いの鶏の描画は、慶長十三年（一六〇八）の嵯峨本第一種『伊勢物語』第十四段に、女を訪ねた男が暁の鶏鳴で帰り、女が鶏を恨む物語[30]に描いて以降、整版本の挿絵に定着をみる。図13の番いもその一つである[31]。元文五年（一七四〇）の『絵本鴛宿梅』も、鶏鳴に纏わる行成と清少納言の贈答歌「逢坂の関」に因み、雌雄一対の鶏を描く。

図11　橘守国

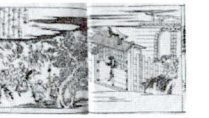

図12　橘守国

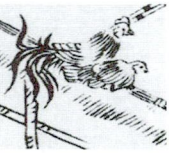

図13　（部分）

葛飾北斎筆（一二九段　頭弁の、職にまゐりたまひて）

葛飾北斎も天保四年（一八三三）～五年頃、「前北斎為一筆」の署名で、函谷関故事に因む長大判の錦絵「詩歌写真鏡・清少納言」（縦52・4㎝、横23・4㎝）を描く。高木によじ登った男の鶏鳴につられて、樹下で棟の鶏も鳴き、夜明けと錯覚した関守が門の閂に手をかけて開門しようとする異時同図の図様で、前掲図12に着想を得たかの如き趣向である。

橘守国筆（一七四段　村上の先帝の御時に）

『枕草子』「村上の先帝の御時に」章段に、大雪が降り、夜に寒月が現れた時、一条天皇の祖父村上天皇が、様器に雪を盛り梅花を挿して兵衛の女蔵人に贈り、「これに、歌詠め」と命じ、兵衛が「雪月花の時」と奏上すると、天皇が「歌など詠むは、世の常なり。かく、をりに合ひたる言なむ、いひ難き」と褒称した打聞がある。「雪・月・花」の三種を取合わせた歌は、夙に大伴家持に天平勝宝元年（七四九）十二月「宴席に雪月梅花を詠む歌一首」の題で、『万葉集』巻十八・四一三四に「雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき児もがも[32]」がある。村上天皇の出題もまるでこの家持歌を問うかの如くでさえあるが、兵衛の「歌」は、家持のそれで

はなかった。家持の歌では、時宜に適うが、村上天皇へ兵衛の心情を表白するに至らないからである。兵衛の奏上した「歌」は、『白氏文集』巻五十五律詩三「寄殷協律」二五六五に、

五歳優游同過日　一朝消散似浮雲
琴詩酒伴皆抛我　雪月花時最憶君
幾度聴鶏歌白日　亦曾騎馬詠紅裙[33]
呉娘暮雨蕭蕭曲　自別江南更不聞

とある第四句「雪月花の時最も君を憶ふ」に拠る。この詩句は、『和漢朗詠集』巻下交友・七三三、『千載佳句』上・人事部憶友・四二三にも見え、人口に膾炙した句である。この句を以て当日の大雪、梅花、寒月の時宜を得た美を唱い、併せて天皇への至誠の念を「憶君」に響かせて対応した見事な機智に、村上天皇は賞賛を惜しまなかったのである。

この逸話は『絵本鶯宿梅』巻一「雪月花時」に、次の説明文と図14の挿絵がある。

村上の御時雪のいとたかふ降たるを楊器にもらせ給ひて梅の花／をさして月いとあかきに是に歌よめいかゞいふべきと兵衛の蔵人に／たびけれハ雪月花の時とそうしたりけるこそいみじうめでさせ給／ひけれ是ハ雪月花時最懐君と云本文なるべし

図14は、右上の雲間に輝く寒月と画題「雪月花の時」を配し、左下に雪が屋根を覆う清涼殿と雪を頂く松樹の大木。また、画面上下の雲間には、左方に御簾を下ろし繧繝縁の畳をもって着座する村上天皇を表徴し、その前方左右に垂纓冠の文官二人、東廂南第四間に火を灯す燈台と様器に雪を盛り梅花を挿した風流物、手前の簀子に風折烏帽子を被り桧扇を手にした「兵衛の蔵人」の畏まった姿を描く。因みに、寒月と松樹の配置や清涼殿の俯瞰図は、享保二十年（一七三五）の『絵本倭比事』巻之三「弓張月[34]」の挿絵に類似し、これに影響を受けたかもしれない。

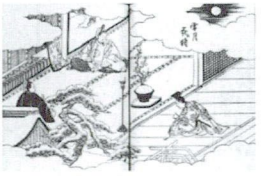
図14　橘守国

なお、「兵衛の蔵人」は、村上天皇主催天徳四年（九六〇）三月三十日内裏歌合の左の女房方人に「兵衛蔵人」（二十巻本）と見え、同じく村上天皇主催の康保三年（九六六）閏八月十五夜内裏前栽合に「秋の夜の月と花とを見るほどに鳴きそふるかな鈴虫の声[35]」と詠んだのも女房の「兵衛の蔵人」である。従って、「兵衛の蔵人」は内裏の女蔵人であり、挿絵に男性を描くのは誤りである。江戸時代初期の延宝二年（一六七四）、加藤盤斎『清少納言枕双紙抄』や北村季吟『枕草子春曙抄』が出版されると、相次いで『枕草子』の注釈書が刊行されるが[36]、江戸期には「兵衛の蔵人」を男房に解釈したから、絵師橘守国もこの通説に従って誤りを犯したと推察される。『枕草子』兵衛の女蔵人の打聞は、兵衛が和歌のみならず、漢詩句にも当意即妙の機智を発揮して村上天皇の賞賛

を得た才媛の誉れが高い内裏女房を紹介をして、中宮定子に奉仕する女房もこうありたいと、清少納言の自戒の念をも込めた章段と見たいが、『絵本鶯宿梅』の挿絵では読者に才女兵衛の在り方を啓発する手本にならないのが惜しまれる。

橘守国筆（二二六段　社は）

『枕草子』「社は」章段に、紀貫之が紀伊国からの帰途、蟻通明神前と知らずに通り、馬が急に病み、貫之が「かき曇りあやめも知らぬ大空に蟻通をば思ふべしやは」の歌を奉納すると馬が快復したという『貫之集』に準じた蟻通明神譚を端緒に、[37]その縁起の一つを次の如く説く。唐帝が日本国を奪おうとして七曲の玉の管に緒を通す難題を出すと、孝養の中将が老父母の智恵に従い、蟻に細糸を結んで管に入れ、出口に密を塗って糸通しの難題を解決した。中将は大臣にまで昇り、死後に蟻通明神を称し、夢枕に「七曲にまがれる玉の緒を貫きて蟻通しとは知らずやあるらむ」と告げた。これを摂取した『絵本鶯宿梅』巻一「蟻通」に、次の記事と挿絵図15がある。

昔唐の帝此国の帝をはからんとて七わだにまがりたる玉の中／通たるに是に糸を通したたまハらんと奉りけるを中将なりける賢／人ありて蟻に糸を付一方の口にみつを付通しけるに蟻みつ／のかにしたがひ出て糸を通しぬ是即蟻通の神と成給ふとぞ

図15　橘守国

挿絵は、雲中に『枕草子』と同じ和歌「なゝわたに／まがれる／玉の／をゝ／ぬきて／ありとをし／とも／しら／ずや／あるらん」を引き、蟻が七曲の管に糸を通すのを見る中将を描く。中将が老父母を棄老せずに孝養を尽した結果、大臣に昇任し、「七曲に」の歌を託宣するに至る『枕草子』の蟻通縁起称徳譚は、江戸期における絵手本の『絵本鶯宿梅』に恰好の題材であったようだ。

因みに、蟻通明神説話の広がりは、『大鏡』が『貫之集』の「かき曇り」歌に依りつつも雨天での異伝を含み、[38]『俊頼髄脳』は貫之が下馬しなかったのを明神が咎めて馬が急死し、神官が明神の託宣を告げて貫之が「あま雲のたちかさなれる夜半なれば神ありとほし思ふべきかは」と詠むと、馬が蘇生する話に変容する。[39]『謡曲集』四番目物「蟻通」は、貫之が紀伊国玉津島明神に詣でる途中、降り頻る雨夜に貫之が「雨雲の立ち重なれる夜半なれば、ありとほしとも、思ふべきかは」[40]と詠み神慮に通じた説話。この雨天を描く挿絵に図16の享保十二年（一七二七）『画典通考』[41]や、図17の延享二年（一七四五）『絵本直指宝』[42]がある。図16は雨天

図16　橘守国

図17　橘守国

の中、貫之の乗る馬が後肢から馬体を崩し、簑姿の地元民が蟻通明神を語る挿絵で、図17は雨夜に灯を手にして蟻通明神社の在処を知る挿絵。なお、『画典通考』巻之一「蟻通」には、『貫之集』に準拠した「紀貫之県より帰京の折からおも飛はからず／乗る馬将に堂ふれ身も安からぬ程に／当りの人に是はいかなる故にかあると尋ね／ければこれこそ此所にいます神農成すなりと／こたへしに何と云へる神にかあると問ければ／蟻通の明神と社申伝へ侍れと申せバ／かき曇りあやめもしらぬ大空に／ありとほしとも思ふべきかは／此哥を読て手を洗ひ 瀬ぎ唱へ捧げぬれは／馬も本のごとく歩み主も 恙なく侍りぬ」との記事を添える。

『絵本鶯宿梅』が『俊頼随脳』『謡曲集』の蟻通明神歌徳説話でなく、『枕草子』の蟻通縁起称徳譚に拠ることに注意したい。

## おわりに

『枕草子』に取材した絵画は、右のほかに、紙幅の都合で言及できなかったものも少なくない。いまそれらの絵画を、『枕草子』の章段、画家、画題、制作年、主な掲載図録など、判る範囲で列記すると、次の如くである。

1　春はあけぼの（一段）茨木春山「春は・夏は・秋は・冬は」の四種類。架蔵。

2　清涼殿の丑寅の角の（二〇段）松岡映丘「桜の花かめ」昭和9年。『生誕一三〇年松岡映丘展』神戸新聞社など。

3　七月ばかり、いみじう暑ければ（三三段）松岡映丘「寝ざめ」大正7年。焼失。『特別展生誕百年記念松岡映丘―その人と芸術』山種美術館など。／松岡映丘「寝ざめ（画稿）」大正7年。『松岡映丘の画稿帖』グラフィック社など。

4　淑景舎、東宮にまゐりたまふほど（九九段）松岡映丘「御ぐしあげ」大正7年。焼失。『特別展生誕百年記念松岡映丘―その人と芸術』山種美術館。／松岡映丘「御ぐしあげ（画稿）」大正15年。『松岡映丘画稿展』西宮市大谷記念美術館。／松岡映丘「御ぐしあげ」大正15年。『近代日本画家が描く歴史を彩った女性たち展』毎日新聞社など。

5　常よりことにきこゆるもの（一一〇段）他、西川祐信『絵本朝日山』元文6年全四〇図／『婦宝文庫』文政1年全一六図／『女教万宝全書東鏡』天保4年全一六図。

6　野分のまたの日こそ（一八八段）松岡映丘「野分のあと」大正7年。焼失。『大正期の日本画金鈴社の五人展』練馬区立美術館など。／松岡映丘「枕草子―秋」大正15年。『特別展生誕百年記念松岡映丘―その人と芸術』山種美術館など。

7　雪高う降りて、今もなほ降るに（二二九段）松岡映

丘「雪」大正7年。焼失。『大正期の日本画金鈴社の五人展』練馬区立美術館など。／松岡映丘「小野の雪」大正15年。『生誕一三〇年　松岡映丘展』神戸新聞社など。

以上、『枕草子』に取材した絵画が『枕草子絵巻』と重なる章段は、今のところ第九九段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほど」に限られる。『枕草子』の機智的な話題が、知識や教養の啓蒙を趣意とした女子教訓書の往来物や絵本などに摂取され、挿絵を介して読者の興味に訴え、江戸期の教訓や称徳などの奨励・教化に寄与したことの意義は大きい。

なお、本稿の図版は架蔵を主にするが、図3については掲載を許可していただいた兵庫県の福崎町立柳田國男・松岡家記念館に深く感謝の意を表します。

注

(1) 拙稿「枕草子『香炉峯の雪』章段の絵画の軌跡と変容」（久下裕利編『物語絵・歌仙絵を考える—変容の軌跡』武蔵野書院、平成23年所収）参照。

(2) 前掲注（1）参照。

(3) 原本は、第一段詞書、第一段絵、第三段絵、第二段詞書、第三段詞書、第二段絵になっている。

(4) 『枕草子』の章段並びに本文は萩谷朴氏『枕草子　上・下』（新潮日本古典集成、新潮社、平成9年・同12年）による。以下、これに同じ。

(5) 「枕草子絵巻—白描やまと絵と金銀泥絵」『国文学』52巻6号、学燈社、平成19年6月。

(6) 拙稿「うへにさぶらふ御ねこは（第七段）」（『枕草子大事典』勉誠社出版、平成13年）参照。

(7) 『小右記』二』大日本古記録、岩波書店、昭和62年。

(8) 小堀桂一郎氏『小堀鞆音—歴史画は故実に拠るべし』ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、平成26年。

(9) 松岡映丘にも翁丸を描いたと思われる素描がある（木村重圭氏『松岡映丘の画稿帖』グラフィック社、昭和54年所収の64図参照）。

(10) 『先進練像玉石雑誌　羽』（栗原孫之丞信充著並蔵板、天保14年刊）巻第五「名和伯耆守源長年肖像并伝」の「大内裏諸門鴟尾」に収載。

(11) 「松岡映丘年譜」（『松岡映丘素描集（第一集）』柳田国男・松岡家顕彰会記念館、昭和53年）、木村重圭氏「松岡映丘年譜」（『松岡映丘画稿展』西宮市大谷記念美術館、昭和52年）、木村重圭氏「松岡映丘略年譜」（『松岡映丘の画稿帖』グラフィック社、昭和54年）、草薙奈津子氏「松岡映丘略年譜」（『特別展　生誕百年記念　松岡映丘—その人と芸術—』山種美術館、昭和56年）等を参照。

(12) 福崎町立柳田國男・松岡家記念館蔵。なお、同素描画は『松岡映丘素描集（第一集）』（柳田国男・松岡家顕彰会記念館、昭和53年）34図や、木村重圭氏『松岡映丘の画稿帖』（グラフィック社、昭和54年）64図などにも収載される。

(13) 拙稿「『枕草子』一条院内裏「北の陣」についての新見」（『日本文学研究』第五十七号、大東文化大学日本文学会、平成30年2月）、および拙稿「『枕草子』「今内裏の東をば」章段新考」（『日本文学研究』第五十八号、大東文化大学日本文学会、平成31年2月）参照。

(14) 木村重圭氏『松岡映丘の画稿帖』64図、グラフィック社、昭和54年参照。

(15) 『松岡映丘画稿展』（西宮市大谷記念美術館、昭和52年）、『松岡映丘の画稿帖』（グラフィック社、昭和54年）、『特別展生誕百年記念松岡映丘―その人と芸術―』（山種美術館、昭和56年）、『大正期の日本画金鈴社の五人展』（練馬区立美術館、平成7年）、『生誕一三〇年松岡映丘展』（神戸新聞社、平成23年）等参照。

(16) 『大内裏図考証』第十一之上（『新訂増補故実叢書　大内裏図考証第二』明治図書、昭和27年）参照。

(17) 『私家集大成』中古Ⅰ、明治書院、昭和48年所収。後文の『清少納言Ⅱ』も同書による。

(18) 片野達郎・松野陽一氏『千載和歌集』新日本古典文学大系、岩波書店、平成5年。

(19) 『女教訓躾方日用宝鑑百人一首姫小松』皇都博栄堂蔵版（見返し）、画図下河辺拾水、書林江戸・須原茂（マヽ）兵衛ほか、安永5年（一七七六）刊。なお、『百人一首姫小松』（明玉堂版、書肆大阪・河内屋太助板、嘉永6年〈一八五三〉正月新板）や、『百人一首姫小松』（大阪明玉堂蔵版、書肆岡本仙助ほか二軒、刊年不明）に図5の挿絵は見られない。

(20) 引用文中の／は改行箇所。以下、これに同じ。

(21) 『女撰要和国織　全』（画工桂佐輔雪典、書肆秋田屋市兵衛、刊年不明）は国立国会図書館ウェブサイト（保護期間満了）から転載。

(22) 『往生要集』巻上之本、大文第一の第七（『大日本仏教全書』潮書房、昭和6年所収）参照。送り仮名を私に補ったところがある。

(23) 『当麻曼陀羅疏』巻第九、序分一、第三正説変相法門分（『浄土宗全書』第十三巻〈第五輯・宗義顕彰〉浄土宗典刊行会、昭和5年所収）参照。送り仮名、句読点を私に補訂したところがある。

(24) 『百人一首花洛織』書画下河辺拾水、彫工匠山本清右衛門、和泉屋善兵衛版、書林江戸・須原屋茂兵衛ほか五軒の付け刊記、寛政6年新刻。

(25) 岡村繁氏『白氏文集四』新釈漢文大系、明治書院、平成二年。

(26) 『新編国歌大観』第三巻・私家集編Ⅰ、角川書店、昭和60年。

(27) 萩谷朴氏『枕草子上』新潮日本古典文学集成、新潮社、平成9年。

(28) 『絵本鴛宿梅一』作者画工後素軒橘守国、浪華書肆文玉堂〈見返し〉、吉田治兵衛版〈刊記〉、書肆大阪・大野木市兵衛ほか十二軒の付け刊記、文元5年四月梓行。以下、『絵本鴛宿梅』は同書による。

(29) 正宗敦夫編纂校訂『地下家伝　十四―廿』二十、日本古典全集、日本古典全集刊行会、昭和13年。

(30) 『伊勢物語』（片桐洋一氏『伊勢物語（慶長十三年刊嵯峨本第一種）』和泉書院、平成10年。句読点、濁点などは稿者による。）に、次の如く見られる。

むかし、男、みちのくにゝすゞろに行いたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけん、せちにおもへる心なむありける。さてかの女、

中〳〵に恋にしなずは桑子にぞなるべかりける玉のをばかり

うたさへぞひなびたりける。さすがにあはれとやおもひけむ、いきてねにけり。夜ぶかくいでにければ、女

夜も明ばきつにはめなでくたかけのまだきになきてせなをやりつる

といへるに、おとこ、京へなむまかるとて、

くりはらのあれはの松の人ならば宮このつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、おもひけらし、とぞいひをりける

(31) 『新注絵入伊勢物語改成上』出雲寺和泉掾（江戸）、元禄11年（一六九八）による。彩色画では、『伊勢物語図会』（大英図書館蔵）、『伊勢物語絵巻上』（小野家蔵）、『伊勢物語絵本』（チェスター・ビーティ図書館蔵）、『伊勢物語絵巻』丙本（鉄心斎文庫蔵）、『伊勢物語絵巻』（大英博物館蔵）などに雌雄番いの鶏の描画がある。

(32) 小島憲之・木下正俊・東野治之氏『万葉集④』新編日本古典文学全集、小学館、平成8年。

(33) 岡村繁氏『白氏文集九』新釈漢文大系、明治書院、平成17年。

(34) 『絵本倭比事三』岩松道朝撰、西川祐信画、書林二鳩堂、寛保2年。

(35) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成（増補新訂）一』（同朋舎出版、平成7年）五五、および六四参照。

(36) 拙稿「枕草子注釈書解題」（『枕草子大事典』勉誠出版、平成13年所収）参照。

(37) 『貫之全歌集（他撰本）』八一〇番（萩谷朴氏『新訂土佐日記』日本古典全書、朝日新聞社、昭和51年所収）に、次の如く見られる。

紀の国に下りて、帰り上る道にて、にはかに馬の死ぬべくわづらふところにて、道行く人たちどまりて云ふやう、「これはここにいましかる神のし給ふなり。社もなく、印もなけれど、いとうたていましかる神なり。さきざきかうやうにわづらふ人々あるところなり。祈り申し給へ」と云ふに、御幣もなければ、なにわざすべくもあらず。ただ手をかき洗ひて、ひざまづきて、神いますかりげもなき山に向ひて、そもそもなにの神とか云ふ」といへば、「蟻通しの神となむ申す」と云ひければ、これを聞きてよみて奉る歌なり。その験にや、馬の心ちもやみにけり

かき曇りあやめも知らぬ大空に蟻通しをば思ふべしやは

(38) 石川徹氏『大鏡』第六昔物語、新潮日本古典集成、新潮社、平成9年参照。

(39) 橋本不美男氏『俊頼随脳』（『歌論集』日本古典文学全集、小学館、昭和50年）参照。

(40) 小山弘志・佐藤健一郎氏『謡曲集②』日本古典文学全集、小学館、平成10年参照。

(41) 『画典通考一』巻之一「蟻通」（普斎岡子雉著述、橘弁次守国画図、浪華書肆宝文堂〈見返し〉、享保12年）。

(42) 『絵本直指宝二』巻之二「蟻通之図」（作者画工橘氏守国、書林大阪・渋川清右衛門版、延享2年）。